『フォーラム第4号』に寄せて

所　一彦

今回は全カリと専門との関係に焦点を当てた特集が組まれている。全カリは専門科目との「総合」を謳っている。しかしその「総合」なるものが具体的に何を意味するのかは，必ずしも明確になっていない。

旧一般教育科目は学部から独立した一般教育部によって展開され，したがって各学部によって展開される専門科目との「総合」が図られにくい不利があった。これに対し全カリは，各学部からの代表が集まった委員会によって展開されるので，専門科目との「総合」は図られやすい筈である。しかしこれは組織がそうなったというだけで，それで直ちにカリキュラムの内容が実質「総合」的になったというわけではない。これまでに達成された多少とも「総合」らしい成果を並べて見よう。

言語教育については，発信を重視し，言語教育の専門性を強化したラディカルな改革が，学部からの要請を受けて行われた。総合教育については，①専門の異なる複数教員が共同で担当する総合Bが設けられ，以前から学部に所属していた専門科目担当教員がそこに大きく関与するようになった，②総合Aのカテゴリー編成や各科目の名称・担当者等の決定に，各学部の意向が旧3系列の場合より大きく反映している，③卒業に必要な全カリ単位が学部毎にほぼ独自に決められている。

しかし，では専門科目と全カリ科目とが，全体としていったい何を学生に提供しようとするのかとなると，必ずしも判然としない。はっきりしているのは，大学教育は専門科目だけでは足りず，その不足を補うのが全カリだということである。では大学教育として何が必要であり，そのうち専門科目はどこまでを満たし，どこからが全カリに残されるのか。

新入生を前に全カリの説明をする立場で考えて見てもらいたい。言語と情報は説明しやすい。スポーツ実習も何とか説明できる。総合Bも，専門分化に対する補完的なアンチテーゼとしての性格が明確である。問題は総合Aである。それは以前の「教養」科目とは違うといわれる。しかし高度教養の必要は，改めて今日強調されているようにも見受けられる。専門科目では足りない何を総合Aが補うのかについては，なお明確にすべき点が多いように思われる。大学教育は今や，社会からの新たな要請を受けて，新たな対応を迫られている。全カリ改革は，そうした新たな対応の一つである。シンポジウムでは，その様相も浮き彫りにされている。

「高畠通敏教授に聞く」も，多分に全カリと専門との関係を意識した企画である。専門科目との「総合」を図ろうとするなら，専門科目がどのように展開されているかを知らなくてはならない。

（ところ　かずひこ　全学共通カリキュラム運営センター部長）